

青春デンデケ デンデケ

—— 映画文学人生論

原作：芦原すなお (1990) 「河出書房新社」
監督：大林宣彦 (1992) 脚本：石森史郎
出演：藤原竹良 林泰文 撮影：萩原憲治 岩松茂
合田富士男 大森嘉之 音楽：久石譲
白井清一 浅野忠信
岡下功 永堀剛敏 寺内先生 岸部一徳

雷はんじや、稲妻じや！

芦原すなお原作の『青春デンデケデンデケ』は没後五十年の夏目漱石をしのぶ『坊っちゃん』のような青春小説である。

舞台は伊予松山の中学ではなく、隣国讃岐の観音寺高校。主役はロックバンドをつくった生徒たち。「デンデケデケデケ」は、Pipeline（パイプライン）という曲の擬音だ。

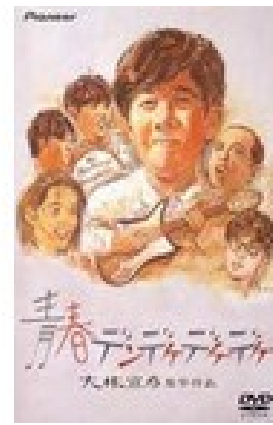
一九六〇年代半ばにテレビからよく流れていたこの曲を大林宣彦監督の映画を観て、久しぶりに聴いた。音痴の私にとっては、ロックは音楽ではなく、騒音のようなものだが、「デンデケデケデケ」はその中でも特に騒々しい、

しかし、ビートルズやローリングストーンなどの曲は外国の音楽としかきこえないが、「デンデケデケデケ」は古い日本人の感性にも訴えるものがある。無法松の打つ太鼓の音に通じている。

原作のページをひらいてみると、第一章のタイトルは、*It's Like Thunder, Lightning*（雷はんじや、稲妻じや！）となっている。雷と稲妻は日本人が古代からなじんでいる自然現象だ。

デンデケデケデケ……

ぼくはつむじから爪先に電気が走るのを感じてはっと目覚めた。……。心臓がそのベースに合わせて、ドッ、ドッ、ドッと高鳴っている。なぜだか股座（またぐら）がふぐふぐする。



青春デンデケデケデケ

映画文学人生論

ロックバンドを結成した高校生が、音楽をきいて股座（またぐら）がふぐふぐするとは、青春小説らしい描写だと思うが、「デンデケデケデケ」はやはり耳で音をきかないと体得できない。こういう例をみせつけられると、文学は映画や音楽にかなわないと夏目漱石も思うかも知れない。

担任は英語の寺内先生で、「仮定法いうんはあウソのことなんぞ」などと教えるが、授業は解りやすいというので、坊っちゃんとはちがって、生徒の間で評判がよかった。「ロッキング・ホースメン」と命名されたバンドにも協力的で、部室を用意したり、楽譜を譲ってくれたりしたが、結婚披露宴で大酒を飲んで、酔っぱらい、踊っているうちにひっくり返って、死んでしまった。前の晩は徹夜で麻雀をやっていたという

映画で寺内先生を演じるのは岸部一徳。一九六〇年代、テレビによく出ていたザ・タイガースのベーシスト及びリーダーだ。ボーカルの沢田研二の引き立て役だったが、いつのまにか渋みのある映画俳優になっている。そういえば、沢田研二も映画に出演し、『男はつらいよ』では、寅さんに恋の手ほどきを受けていた。

卒業すると、「ロッキング・ホースメン」は解散し、仲間たちはそれぞれの道を歩む。「死の舞踏」をした寺内先生の思い出も薄れて行く。

雷が鳴るぞドンドコ何処何処と